

## 体験活動が多いほど自己肯定感が高いです。

6月9日（火）

2年生のトライやる・ウィークも無事に終了しました。兵庫県の重要施策である「体験活動」の意義はとても大きいです。今日はその「体験活動」について触れたいと思います。この調査は少し前になりますが、全国の公立の小学1～3年生の保護者、小4～6の児童とその保護者、中学2年生と高校2年生の生徒を対象に実施し、子ども1万8,031人、保護者1万5,854人から回答を得ました。それによると「自分には、自分らしさがある」「今の自分が好きだ」などの質問に、「そう思う」と回答した自己肯定感が高い（「高い」と「やや高い」の合計、以下同じ）と思われる子どもの割合は、小4が61.4%、小5が57.3%、小6が54.9%、中2が32.8%、高2が27.6%で、学年が上がるにつれて、自己肯定感が高い子どもの割合が減っています。特に小6と中2では22.1ポイントもの差があり、小学生から中学生になると自己肯定感が大きく下がるのが特徴です。国際比較調査などでも、日本の高校生の自己肯定感が著しく低いことがわかっており、子どもたちの自己肯定感を高めることは、学習指導要領でも課題の一つとなっています。一方、子どもたちの体験活動と自己肯定感との関係を見ると、「海や川で泳いだことがある」などの自然体験の多い子どものうち、自己肯定感が高かった者は61.1%なのに対して、自然体験が少ない子どものうち、自己肯定感が高い者は29.7%にすぎませんでした。同様に、「タオルやぞうきんを絞ったことがある」などの生活体験の多い子どものうち、自己肯定感が高い者は60.0%、生活体験が少ない者では27.9%でした。また「食器をそろえたり、片付けたりすること」などのお手伝いを多くしている子どものうち自己肯定感が高い者は63.4%、お手伝いをほとんどしていない子どもでは22.4%でした。小さなころから自然体験や生活体験、お手伝いなどを経験している子どもほど、自己肯定感が高いと言ってよさそうです。この他、スマートフォンの依存度と、自然体験・生活体験・お手伝いなど体験活動の間に、関連は見られませんでした。その代わりに、自己肯定感が高い子どもほど、スマホの熱中度が低いという結果が出ました。スマホ所有者のほとんどは高校生であるため、体験活動の影響が少ないためと推測されます。逆に言えば、スマホの問題についても小さなころから保護者との関わりの中で自己肯定感を高めることが重要といえるでしょう。○2名の教育実習生の様子

